
星空の下で

涼風 蒼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

星空の下で

【Nコード】

N5812U

【作者名】

涼風 蒼

【あらすじ】

中学最後の夏休み、僕ら幼馴染の三人はいつものように天体観測へと繰り出す。ずっと一緒だった僕ら。だけど、このまま一緒に、なんていられるはずがない。だからこそ、願わずにはいられないのかもしれない。このままずっと一緒にいたい、と――

月のない夜空。星は我が物顔で光輝いている。まるで、月がないことを喜んでいるように。

背中に望遠鏡を背負うと、僕は形振り構わず家を出た。向かう先は、唯一空に近づける丘の上。今日はそこで夜空の観測会をしよう、ということになっている。

煩いくらいに蝉が鳴き続ける季節。夜になれば若干暑さも紛れるが、それでも暑いものは暑い。しかも、早々に暗くならないから困ったものだ。

「はっ……はぁ……」

丘の上に着くと、僕は荒い呼吸を繰り返していた。走ったせいもあり、だらだらと汗が流れている。気持ち悪さに顔をしかめるが、そんなことを気にしている場合ではない。地面に望遠鏡を設置し、何度か微調整を行う。まだ日が暮れたばかりなので、空は少々明るかった。肉眼で見ても、望遠鏡から覗き込んでも、一番星すら見つかからない。

「少し早かったかな？」

予定では七時に集合となっている。腕時計を覗けば、丁度七時を指していた。草原に寝転がると、いまだ暗転しない空を眺めてみる。暇つぶしに、何度か時計を見てみたが、皆が着いた頃には十分が経過していた。

「遅いよ、二人とも」

一緒に星を観測しようとなったのは僕を含めて三人。幼馴染の晃と夏喜だ。夏休みの自由研究は、いつも僕らで手を組んで共同提出していた。

「ごめん。ちよつと出るの遅くなっちゃって」

「悪かったって。ほら、埋め合わせのアイス」

「やった♪」

謝る二人に、僕は馴れっこのように苦笑する。そんな僕に、晃は袋に入っていた棒キャンディーを渡してきた。

晃の家はコンビニを経営している。そのおかげもあって、何かと物にありつけるのだ。早速晃が持ってきたアイスにかぶりつきながら、僕らは星が顔を覗かせるのを辛抱強く待った。

時計の針が九時を指す頃。ようやく星が空を埋めた。観測のために新月の日を選んできたので、月の光はない。そのため、夜空の星は一層輝きを増していた。

「観測開始、だな」

「うん」

「そうね」

僕が望遠鏡を覗き込み、晃が正座を言い当て、夏喜がノートに書いていく。それぞれの分担をわけていたおかげで、観測記録はどんどん進んでいった。ある程度までノートを埋めると、僕らは小休憩に入った。

「これで、今年の夏休みの宿題も終ったな」

「そうだね。でも晃、いっつも何か忘れててやってこれてないじゃん」

「そうそう。結局あたしたちの答え写して、なんとか提出してるもんね」

「う、うっさいな！ 仕方ないだろ。夏休みの間中、結構手伝いやらされるんだから」

「そこは同情するよ」

「そのおかげでアイスとか奢ってもらえるけどね」

夏喜の台詞に、僕と晃は顔を見合わせ笑った。それに知られて、夏喜も笑い出す。三人の笑い声が、夜の丘に響いていった。

一通り笑い終えたあと、僕らは黙って夜空に目を向けた。広大な

空は、夜も昼も問わず壮大だった。

「ねえ、二人はもう進路決まった？」

おずおずといった感じで夏喜が聞いてきた。晃はどうか知らないけれど、僕は特に決めていないので、首を横に振った。

「晃は？」

夏喜と僕は一斉に晃に目を向ける。晃は何とも言えない表情をしていた。

「晃？」

「……そういう夏喜はどうなんだよ？」

「あたし？ あたしは……まだ、決めてない」

夏喜は伸ばしていた足を立て、その足を腕で抱え込むようにして座る。

「何で、そんなこと聞くの？」

僕は気になっていたことを、率直に聞いた。

「だって、あたし達だって、いつも一緒に居るわけじゃないんだよね？ずっと一緒なんて……無理だもん」

「……何か、らしくないな」

「うっさいな」。あたしだってこうゆう時はあるの！

晃と夏喜は、無理に楽しそうに振舞っているように思えた。

それは、昔からの付き合いからくる勘。でも、さっきの夏喜の台詞が、僕の頭にも引つかかっていた。

そう、いつまでも一緒なんて無理なんだ。そんな当たり前のことを、いままで考えたことがなかった。だって、同じ高校にも大学にも行くものだって思っていたから。仕事まで一緒とは思ってなかったけど、まだ一緒に居られると思っていたから。

「久遠？」

考えにふけていた僕に、夏喜が声をかけた。

今僕はどんな表情をしているだろう？

自分のことなのに、分からなかった。

「そんな顔しないでよ。あたしだって……」

「……」
「……」

今までであったことない、気まずい空気が流れた。僕らは何も言えず、ただただ時間だけが過ぎていく。

「ねえ」

そんな空気を破ったのは、意外にも僕だった。いつの間にか言葉が口を突付いていた。

「大人になってもさ、暇な日に、またこうやって観測会しない？」
「え？」

「いつまでも一緒には居られないけどさ、またこうやって集まって何かをすることは出来るだろ？」

星に手を伸ばすように、手を空に向ける。広い空に、広い世界。決して同じにはなれないけれど、同じ時間は共有出来る。

「だったら、何で観測会なんだよ」

そう笑いながら突っ込んでいくる晃に、僕も笑い出した。

「確かに」

「そうね。別に観測会じゃなくても、集まれるもんね」

夏喜も、つられてクスクス笑い出す。さっきまで重たかった空気はどこへやら。気付けば、いつものように楽しそうに話せていた。

夏喜の不安も分かるけど、今はまだ、この時間のことをだけをおいておいても良い気がする。

後一年すれば、僕らも受験生だ。集まることも難しくなるだろうし、進む道が皆別々かもしれない。寂しいとは思っけれど、だからこそ、一緒に居られる時間を大切にしようと思えてくるんだ。

（叶うなら、いつまでも仲の良い幼馴染でいられますように）
満天の星空に、僕はソツと願う。

夜空に輝く星達は、楽しそうに笑う僕らを、優しく見守ってくれている気がした。

THE
END
|

（後書き）

今所属している文芸部にて、文化祭で書いた小説です。
テーマは「空」……だったと思います。いや、天候だったかな……

とりあえず、空に関係しているものがテーマでした。
それで出来たお話です。

ファンタジーをよく書きますが、なんででしょうかね。
短編はいがいと、こういった現代ものが多いです。

ま、書いてることとか、いろいろくだくだな気もしますが（……）

しかも、私は幼馴染いないので、そこらへんの心理がよく分かって
ません（笑）

それでも、楽しんでいただけのなら、嬉しいかぎりです（^^）

ここまで読んでくださり、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5812u/>

星空の下で

2011年9月7日03時15分発行